

四凶の日常絵巻

ホネ星人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

太古、中国に存在していた邪悪な魔物達、四凶。そして四凶は、人の姿となり、今も生きていた。これはそんな四凶の周りとは少しズレた日常風景の物語。

目次

登場人物紹介	1
一凶目	5
二凶目	10
三凶目	15
四凶目	19
五凶目	23
六凶目	27
七凶目	31
八凶目	36
九凶目	43
十凶目	48

十一凶目	53
十二凶目	58
十三凶目	62
十四凶目	67
十五凶目	72
十六凶目	78
十七凶目	84
十七・五凶目	94
四凶の外伝絵巻	
外伝壺凶目	101
外伝弍凶目	107
外伝参凶目	113
外伝肆凶目	120

登場人物紹介

キユウキ 男 見た目年齢16歳ぐらい i c v 梶 裕貴

身長172cm

髪 短髪の青と黒の縞模様。

肌 青色。

目 猫目の赤い瞳。

服装 上半身裸で黒いズボン愛用。

その他特徴 体全体に黒い縞模様。背中から青い鳥の羽根が生えている。

性格 正直者が嫌いで嘘つきは好き。ひねくれ者で常に正しくない者の味方。でもなんだかんだで世話焼き。日が落ちると眠くなるタイプ。

好物 餃子（ニンニクましまし）。

嫌いな物 セロリ。

本当の姿は、青い鳥の羽根が生えた、大きな虎。四凶の中では唯一の終始ツツコミ役。四凶の方のメンバーの事は悪くは思っていない。

コントン 女 見た目年齢15歳ぐらい i c v 安野 希世乃

身長162cm

髪 長髪の黄緑色。

肌 肌色。

目 ぱっちり目の紫色の瞳。

服装 黄緑色のネグリジエと黄緑色のモフモフ靴。

その他特徴 八重歯と萌え袖。

性格 純粹で好奇心旺盛。しかし自制心がほとんど無い。マイペースで明るく、おしゃべり。眠くなった時にすぐに寝ちやうタイプ。

好物 ジャージャー麺（ネギたっぷり）

嫌いな物 人参。

本当の姿は、犬と熊が混ざったような黄緑色の怪物。四凶、特にキュウキが大好き。ただし冬場はトウテツの毛皮が一番になる。

トウテツ 男 見た目年齢25歳ぐらい i c v 杉田 智和

身長206cm

髪 白髪ソフトモヒカン。

肌 紫色。

目 きつめのつり目の赤い瞳。目に光が無い。

服装 上半身は腕のみ白い毛皮装備。白い毛皮のズボンをはいている。

その他特徴 羊角 牙

性格 まともな理性は数ミリほどしか持ち合わせてない。しゃべり方が猿みたい。怒りの沸点極端に低い。寝たい時に寝るタイプ。

好物 何でも食べれる。

嫌いな物 無い。

本当の姿は、鋭い牙を持った、人面羊。四凶の他のメンバーの事は別に死んでも構わないと思つてたりする。しかし、トウコツだけは尊敬している。

トウコツ 女 見た目年齢27歳ぐらい i c v 渡辺 明乃

身長184cm

髪 黒の長髪。

肌 肌色。

目 切れ目長の赤い瞳。

服装 虎模様の胸元が大きく空いたドレスと、網タイツと赤いハイヒール。

その他特徴 左頬に切り傷の痕。八重歯。

性格 冷静沈着。四凶の中では一番真面目。でも、趣味が人間同士を仲違いさせて戦争を起こさせてたくさんの人が死ぬのを見ながら酒を飲む事などゲスさも四凶一だつたりする。でも、何処か抜けている。三日寝なくても平気なタイプ。

好物 麻婆豆腐（豆腐が真つ赤になるぐらい辛いやつ）。

嫌いな物 ピーマン。

本当の姿は、かなり長い尻尾を持つ、人面虎。四凶のメンバーの事は唯一の家族と思つてたりする。

一 凶目

『四凶と家事分担』

中国の山岳地帯の奥深く、小さな宮殿（と言つても観光地とかの有名な宮殿より小さいだけでそこそこには大きい。）にある庭、そこで一人の青年がいた。その青年の肌はキレイな青色をしており、体全体に黒い縞模様がついている。そして背中からは青く大きな羽根が生えている。年の頃は16歳ぐらいで髪は青と黒の縞模様。目はまるで猫のようで、その瞳は赤い。そんな青年はいまたくさんの洗濯物を干していた。

「これで最後つと、たつく、自分が着るもんぐらい、自分で洗濯しろつーの。特にトウテツの服は洗うの大変なんだからよく。」

彼こそが、四凶が一角、《キュウキ》である。

「えーつと、次は皆の部屋の掃除。それが終われば、風呂掃除、トイレ掃除ときて、それで風呂沸かすための薪を割って、風呂の準備をしたら、今日の晩飯作つて………つて」

「何で俺がここまで家事をやんなきやいけねえんだあああああああああああああああああああ
!!!!!!」

「理不尽だ!」

「何が何が?」

「一体何が理不尽なんだ?」

「ダブン、カジノコト、ダト、オレ、オモウ。」

宮殿の大広間、そこにこの住人達が集められていた。

「キュウキ君そんなに怒ってもどうしたの? カップ焼きそばの湯切りに失敗したの?」

なぜ集められたのか理解しておらず、的外れな事を言っている、黄緑色の長髪、ぱっちり目の女の子が四凶が一角、《コントン》。

「とにかく落ち着け。血圧が上がって早死にするぞ。」

こちらにも集められた理由こそ分らないようだが、とりあえずキュウキをなだめている、黒髪長髪の切れ目長の女性が一角、《トウコツ》。

「キュウキ、オコル、ムリナイ。キュウキニ、カジ、ヤラセスギ。」

唯一理由を把握している、白髪のソフトモヒカンで筋肉質、きつめのつり目の男が四凶が一角《トウテツ》である。

「トウテツだけじゃねーか！ まともに理由把握してんの！」

「なるほど、つまりキュウキはいまの家事分担に不満がある訳か。」

「嫌、それ以前に分担してなくね!? この家の家事九割八分俺がやってんじゃん！」

「カジ、ブンタン、ダイジ。」

「トウテツ！ お前だからな洗濯大変にしている原因は!? さっきから自分関係ないみたいな態度とってんじゃねーよ！」

「ねえねえ、おやつまだ〜?」

「コントンは話を聞けー!!」

〜窮奇なため中〜

「とにかくくだ、いま俺が家事の約九割をやっていているわけだ。これをせめて俺がやる家事を約五割ぐらいに減らしたいわけだ。」

「つまり、飯も自分で作った方がいいのか？」

「飯は俺がやる。また台所がお亡くなりになるのはきつい。」

「んじゃ〜、私たちは何するの〜?」

「とりあえず皆には、部屋の掃除と、洗濯物を頼みたい。」

「分かった！どこのお手伝いさんがいい？」

「じ、ぶ、ん、で、や、れ。」

「オレ、ソウジ、ニガテ。ヨゴレタ、ヘヤ、ソレゴト、カタツケルナラ、トクイ。」

「お前はこの家を倒壊させてえのか？」

「分かった。努力しよう。しかしそれだけでいいのか？」

「出来る事なら、薪割りの仕事をローテーション制度にしたい。」

「ローション制度？」

「一旦黙ろうか。コントン。」

「デモ、ソレダト、オレ、イチバンプロ、ハイレナイ。キュウキ、オレ、ローテーション、ハズシテクレ。」

「はっ倒すぞ。」

「なら、明日は私が薪割りをしよう。トウテツが洗濯物を、コントンが部屋の掃除を。それでもいいな。」

「かしこま〜！」

「ワカツタ、オレ、ガンバル！」

「……………期待して……………いいんだよな……………期待して……………」

翌日

「期待した俺が馬鹿だった。」

薪割り場はガス爆発でも起きたかのぐらいのクレーターと化し、

洗濯物は修復不可能なレベルにズタズタに、

部屋は本人曰く掃除をする前の3倍は散らかっていた。

「すまん……。なかなか割れない物だから、つい力を込めすぎてしまつて……」

「マツシロ、シヨウト、オモツタ。ダカラ、オモイツキリ、コスツタ。キツイタトキ、テ
オクレダツタ。」

「掃除つて難しいね〜。」

「もう、家事は全部……。俺やるわ……。」

ぼろ雑巾と化した愛用のズボンと、自分の部屋の惨状を見つめながら、キュウキは力無くそう呟いたのであった。

一凶目 終

二凶目

『四凶とおつかい』

宮殿の大広間、そこでコントン、トウテツ、トウコツの三人が思い思いにくつろいでいた。そこにキュウキが買い物袋を持って部屋に入ってきた。

「おーい、誰か買い物に行ってくれないか？」

「すまんが断る。」

「オレモ、オナジ。」

「私が行くよー！」

「……誰も行きたくないのかー？」

「ほらー！私！私！コントンが行きまーす！」

「ホントに誰もいないのかー？」

「キュウキ嫌がつてるな……。」

「ほらほらほらー！コントンが行くつてばー！」

「くつ！しょうがねえ。コントン、ちゃんと出来るんだな？」

「うん！問題ないよー。」

「んじやあ、市場に行つて、キンシンサイと鶏肉、あと洗濯用洗剤を買つてくる事、いいな？」

「わかつた〜！」

「ホントか？メモした方がいいんじゃないか？」

「大丈夫大丈夫〜！バツチリ覚えたよ〜。それでは行つてきま〜す！」

「ホントかよ…。」

【市場】

「何買つてくるんだっけ〜？」

「やっぱりね〜！！！！だと思つたわ！絶対忘れるつて！後つけてよかつたわ！」

「そういえば、コントンが買物に行くのはこれが初めてだったな。さながらはじめての「言わせねえよ!?!」なんだつたらあの音楽も流した方が「駄目に決まつてんだろ!」つまらんなあ。」

「コントン、ガンバレ。」

「え〜つと、確か「キ」がつく物を買つてくるんだよね〜。」

「おお！思い出そうとしてる！そうそう！「キンシンサイを買ってくるんだ」「そうだ！キヤビアだ〜！」どこをどう予測変換したら今キヤビアが出てくるんだ！」

「さすがコントン…。」

「ヨソウ、ウラギリナイ。」

「後は〜お肉だよね〜。」

「そう！お肉！それが何肉かを思い出せr」「思い出した！カエル肉だよね〜！」俺一言もカエル肉なんて言ってるねえ!!つか、食わした事もねえだろ！」

「なぜカエル肉なんだろうか…。」

「カエル、トリ、アジガ、ニテル。」

「もういい…せめて洗濯用洗剤だけでも思い出してくれ…洗濯物がたまっているんだ…ホント、今日必要なんだ…。」

「あとはたしか〜、洗濯…洗濯…洗濯…ん〜」

「そうだ！洗濯機だったね〜！」

「ゴフウ!!」

「キュウキ大丈夫か!?!凄い量の血吐いたぞ!?!」

「オレ、モウ、ナニモ、イエナイ。」

「もういい…わかった…帰ろう…金が足らないとかですぐ帰ってくるだろう…グフツ」
ガクツ

「キュウキが気絶した…。」

「カエルカ…。」

数時間後

「遅いな…、コントン…。」

「まさかあいつ値切り交渉してねえだろうな…。」

「ただいま〜！」

「あつ、帰ってきた」肉まんたくさん買ってきたよ〜！」

「キャビアやらカエル肉やら洗濯機はどうしたあああああ
!!!」

「コントン…オソロシイコ…。」

「さ〜！皆で肉まん食べよ〜！」

「今日の晩飯と、たまった洗濯物が……。」パタリ

二凶目 終

三 凶目

『四凶と人間』

「……………」

いつもの宮殿の中庭、そこにキュウキが立っていた。

その顔にいつものツツコミ担当の雰囲気は微塵もない。

「キュウキ。」

声をかけてきたのは同じく深刻な表情のトウコツだった。

「トウコツ、人数わかるか？」

「ああ、800人程だ。一応コントンとトウテツを起こすか？」

「いや…そんな暇はないみたいだぜ。」

その瞬間、中庭に武装した兵団が乗り込んできた。

その中のキュウキとトウコツの二人を見た十数人程がマシンガンを乱射してきた。

しかし、キュウキはその銃弾をすべてたたき落とし、トウコツに至っては、目を瞑つ

たまま、すべての銃弾を避けきった。

そして、キュウキはマシンガンを撃つてきた兵士達の一人に一瞬で接近し、その首をねじ切った。

トウコツはそのねじ切られた首が宙に浮いた瞬間、銃撃してきた兵士達の首を音も無く、流れるようにへし折っていく。そしてキュウキがねじ切った首が地面に落ちた時にはマシンガンを撃った兵士は全滅した。

「随分と威勢の良い挨拶だな。しかし挨拶する時は頭を下げないと失礼だぞ。」

「まあ、俺達には下げてもアウトだけだな。」

「うるさい！この化け物どもg」

そう叫んだ兵士はその言葉を最後まで言う前に急に現れたトウテツによって無惨にも頭を粉碎された。

「ウルサイノ、オマエ。オレ、ネレナイ。」

明らかに機嫌が悪いトウテツは呆然としている他と兵士達を睨む。

「シカシ、ハラガ、ヘツタ。」

そう言うと、一番近くにいた兵士を捕まえると、

「オレノ、ヤシヨク、ナレ。」

その頭を食いちぎった。それだけではなく、その兵士の体も何の躊躇もなく食っていく。

そして残ったのは、肉の欠片も付いていない、所々噛み砕かれた人骨のみだった。

そしてトウテツが他の兵士達を睨むと、その兵士達は皆、我先にと逃げていく。しかし、

「鬼ごっこ？やるやる！じゃあ私鬼やるね〜！」

その言葉が聞こえると同時に、次から次へと兵士達の体が砕かれていく。

そして一番先頭にいた兵士が見た最後の光景は、

無邪気な、しかしどこか狂気をおびた笑顔を浮かべながら、両手と服を返り血で赤黒く染めた黄緑色の髪の毛の少女が自身に触れようとしている所だった。

翌日の朝

「ちくしよー、こいつらが来ると毎度掃除が大変なんだよなー。」

「しょうがないだろ、飛び散る物は飛び散るんだから。」

モツシャモツシャ↑残骸を食べて処理しているトウテツ。

「鬼ごっこ楽しかった〜。でも次はもっと頑丈なのが良いな〜♪」

「ハイハイ…つと、まだ残ってたのか。」

「ヒイ！」

「どしたのく？」

「んー？まだ残ってただけー。」

「お願いだ！命だけは…何でもしまさ「お前らハエに命乞いされても殺すだろ。」

そうキュウキが言い放った瞬間、唯一生き残っていた兵士の首が落ちた。

これも彼らの日常の風景の一つ。

三凶目 終

四凶目

『四凶と仕事』

「なあ。お前らの金の出所どこからなの？」

そう大広間にいるコントン、トウテツ、トウコツの三人に聞いたのは、キュウキだった。

「どうした？ 藪から棒に？ お前が金の事を気にするなんて珍しいな。」

「いやな、これから家計簿をすっかりつけて置こうと思つてさ。でもお前らが何で金稼いでるか知らないでつけるのも怖いからな。」

ちなみにキュウキは裏山でとれるタケノコを売つて金を得ている。

「何故知る必要がある？ 金が入ればそれでいいではないか。」

「まあそうなんだけどさ、コントンやトウテツが何してるのかなーつて。」

「ナゼ、キニナル？」

「私〜？」

「仕事出来なさそうだから。特にコントンが。まあトウコツの仕事も気にならなくはないけどさ（笑）。」

「私は仕事してないぞ。」

「ん!?ならどうやって金稼いで来てるんだ?」

「家にある物売って金を得ている。」

「……………」

「なるほど、道理で俺のズボンがちよくちよく紛失するわけか。」

「私のぬいぐるみがある日突然姿を消したのも?」

「オレ、ツノ、ナクナツタ、コトアル。ゲイイン、ワカツタ。」

「……………しまった。」

くトウコツ制裁中く

「ズミマゼンデジダ」↑(ボッコボコのトウコツ)

「どうする?トウコツちゃんの中身全部出して綿詰めて新しいぬいぐるみにする?」

「コンド、オレガ、アタラシイノ、カッテヤル。ダカラ、ヤメテヤレ。」

「は〜い。」

「ろくなもんじや無かったな…。そういえばトウテツお前はどうかなんだ？」

「オレハ、ゴミカイシユウノ、シゴト、シテイル。」

「え…、まさかゴミを食って回収「シテナイ。チャント、ゴミカイシユウノ、クルマツカッテル。」ですよ〜。」

「……ウマクナイカラナ。」ボソツ

「え？」

「ナンデモナイ。」

「あ、ああ。じゃあ、最後はコントンだな。コントンはいったい何してるんだ？地味に一番稼いで来てるだけ疑問なんだけとき。」

「私〜？私はなんか読者モデル？っていうのやってるよ〜。」

「……………え？マジ？」

「ナンダ。キュウキ、シラナカッタノカ？」

「まあ、キュウキは家で一番そういった流行などに興味が無いからな。知らなくても変ではない。」↑（いつの間にか復活しているトウコツ）

「いや、だとしても何で誰も言わない？コントンが読モしてるって。」

「本人から聞いてると思ってたから。」

「キュウキ君なら知ってるかな〜って。」

「……………」

「なんか読んでた雑誌で募集してたから〜なんとなく応募して〜オーディション？つてのいつたら採用されちやたみたい〜。」

「……………トウコツ。」

「……………なんだ？」

「お前恥ずかしくねえのか？」

「……………キュウキそろそろ飯にしないか？」

「……………だな。」

四凶目 終

五凶目

『四凶と尻尾九つ』

「んじゃ、行つてきまーす。」

キュウキは週に一度、市場の外れにある小さな居酒屋に

必ずいく。

その餃子がキュウキの好みびつたりの餃子だからである。

ガラガラッ

「おい。おやつさん！いつもの餃子一つ！」

「あいよっ！」

「たつく、トウコツのヤローまさか俺達の私物まで売つてたなんてなー。」

ガラガラッ

「てんちよーさん、きつねうどん一つくださいなあ。」

「あいよっ！」

「ふう、おや？久しぶりだねえキュウキの坊や。」

「ん？あ！キュウビの狐!?なんで!？」

「大きくなつたねえ。数百年ぶりかなあ。」

「おい！今まで何してたんだよ！日本に行つてそれつきりで、日本の妖怪になつちまつたとか噂されてたんだぞ！」

「おやおや？そんなに心配してくれてたなんて、やっぱり初恋の人は守りたいのかい？」
「ちげえよ！それに初恋でもねえし！」

「だつてキュウキの坊やがまだちびっこい頃は、よくあたいの後ろに付いてきては、きつ姉、きつ姉つて」「人の黒歴史を豪快にほじくり返してんじやねえー!!」

「ふふ、変わったねえキュウキの坊や。ところで他の四凶の奴らは元気にしてるのかい？」

「ああ、トウコツがはらわた抜かれそうになつたり、コントンが肉まん大人買いしたり、トウテツが俺のズボンをズタズタにしたりするぐらい元氣だぜ。」

「相変わらずみたいだねえ♪」

「で？いつたい日本で何してたんだ？」

「んー、人間のお偉いさん騙して、正体ばれて、殺されかけたから傷を癒やしてたのさあ。」

「まじか。」

「まあ、傷が癒えた後は、日本の観光してたよ。」

「殺されかけた時点で帰ってこいよ。」

「そう？人間のの方はあたいが死んだみたいに思ってたみたいだけどねえ。」

「いや、でもさー」「はい！餃子一丁！」あ、あぎっす！

「はい！きつねうどん一丁！」

「おお！これはなかなかうまそうじゃないかい！早速いただきますよ。」

「いただきます。」

「……………」

「うまい！」テーテツテレー

ガラガラツ「ありがとよー！」

「さてと、帰るか。これからキュウビの狐はどうするんだ？」

「これからはこの国で生活してくよ。日本にも飽きてきたしねえ。」

「そっか…あのさ、いらねえ心配かもしれないけどよ、この国の今の妖怪たちは、あんたの事を嫌ってる。だからいろいろ問題が起こるかもしれないぜ。」

「なあに、あたいは元より意地悪で嘘つき。どっちにしる嫌われるだろうさ。」

「……………本当にきつい時は、言ってくれよ。あんたと俺の仲だろ。頼まれたら、四凶全員

で助けてやるよ。」

「ふふ、そんな事が無いようにあたかも頑張るさ。じゃあね、キュウキの坊や。」

「ああ、じゃあな………きつ姉。」

「ところでおねしよの癖は治ったのかい？」

「ここに来て、また俺の黒歴史をえぐってくんじゃねえー！！！！」

五凶目 終

六凶目

『四凶と日記』

ある日の昼間。キュウキはいつも通り掃除をしていた。ちなみに他のメンバー達は仕事に（トウコツのみ探しに）行っている。

「よし！トウテツの部屋終わり！次いくぞ！」

そう言つてキュウキはコントンの部屋に行く。

「失礼しまーす。……ホント前から疑問なんだけど、コントンに掃除させると地獄絵図なのに、なんで本人の部屋はこんなにキレイなんだろうか……。ん？なんだこれ？」

キュウキは机の上に置いてあるノートを見つめる。

「何々……『コントンのにつき』？あいつ日記なんて、書いてたのか。……非常識かもしれないが、あのコントンがどんな日記を書いているのか気になる、少し見てみるか。どれ……」

○月1日

今日は皆に人間の姿になる方法を教えてもらった〜！とっても不思議な気分！人間

みたいに物をつかんだり、仰向けで寝ころがれたりできるなんて夢にも思わなかった。そして今日一番嬉しかったのはキュウキ君にカワイイって言ってもらえた事！これからはこの姿で皆で暮らすんだって！

○月2日

今日、私たちの新しい家に人間がたくさん来たく！遊んでくれると思つたのに、皆で痛い事してくるからちよつとお返ししたら、皆死んじゃった。でもキュウキ君もトウコツもトウテツも気にする事じゃないって。次人間たちが来たら今度は仲良く遊べるかな？

○月3日

キュウキ君がひどい意地悪してきた！嫌いなニンジン食べなきゃおやつ抜きなんて！しかも残したらホントにおやつ抜きにした！キュウキ君だって自分の嫌いなセロリ料理に使わないくせに！

○月4日

今日、キュウキ君にひどい事言っちゃった。本当の家族でもないのに偉そうにしないでよって言ったら、凄く怒ってそのままどっかに出かけてちゃった。帰ってきたらちゃんと謝ろう。

○月5日

キュウキ君まだ帰って来ない。さみしい…。

○月6日

キュウキ君がボロボロになって帰ってきた。人間が一人のキュウキ君にたくさんの数で襲いかかってきたんだって。人間ってひどい奴らだったんだね。

○月7日

今日はキュウキ君にひどい事した人間たちで遊んだ〜！皆泣きながら走っていくから、追いかけて思いっきりタツチ〜！それだけで面白いくらい簡単に壊れちゃう〜！人間って面白いね〜！

○月8日

キュウキ君にひどい事言つてゴメンねって、言つた。そしたら反省したならもう良いよつて言つてくれた。キュウキ君はなにがあつても私の大切な、家族だよ〜！でもセロリは食べれるようになった方が良いと思う〜。

○月9日

今日h「キュウキ君ただいま〜！私の部屋で何してるの〜？」

「あ！コントン！やべっ！」

「なにが〜？あ！それ私の日記〜！勝手に読むなんてひどい〜！」

「ゴメンゴメン！悪かった！許して！」

「むく！許さないく！こうしてやるく！」

「ギャー！痛い痛い！卍固めはやめてー！」

その日の夜

キュウキ君は一人、台所にいた。

「あいつ……………まだあの日の事……………引きずってんのか…。」

「セロリ、食えるようになんねえとな……………ハハハ。」

六凶目 終

七凶目

『四凶と白虎』

ある日の午後、キュウキは特にやることも無いのでブーツとじていた。

「ブーツ」（濁った目）

ピンポーン

「ハッ。誰か来た？誰だ？キュウビ？」

キュウキは玄関に行きドアを開ける。

「久しぶりです。兄z『ボタン』」

そして閉めた。

「……………ふうー……………よし。」

そして再びドアを開ける。

「兄者、なぜドアをs『ボタン』」

そして再び閉めた。

「いや、閉めないでください！」ガチャッ

「ごめん、幻覚かと思って。」

「なんで!？」

結局自分でドアを開けて入ってきたその少女は、白と黒の縞模様髪の毛の毛。白い虎模様のキョトンシー風の服。黄色い猫のような目をしていた。

「まあしかし、久しぶりだな、ビヤッコ。」

「はい、兄者。」

この少女こそが四神獣の一角、ビヤッコである。そしてキュウキのただ一人の妹である。

「ん?あれ?お前に家の場所教えたっけ?」

「年明けに今の家の住所で手紙が来ました。」

「……………トウテツのヤロー。どこの悪の秘密結社だよ……」

「ところで兄者。」

「なんだ?」

「まさか女性と暮らしていませんよね?」

「えっ!あーそれは「たっだいま〜!」はいアウトー!」

「お腹すいた〜今日の晩御飯なに〜?ってあれ〜?お客さん〜?」

「……………女……………」

「アハハオワタ。」

「兄者が女と暮らしてる。きつと女が誘ったんだ。絶対そうだ。そうに決まってる。そんなの許さない。だって兄者は私の物。お兄ちゃんも私の物。オニイチャンはワタシの物。オニイチャンワタシノモノ」

「わー！わー！落ち着けー！いいから一旦落ち着けー！」

「ねこの人病院に連れてった方が良くない？」

「残念だがこれが平常運転なんだ！」

「へ？」

「えっ!?彼女!?私がお兄ちゃんの彼女!?そう見える!?ということはその女はお兄ちゃんの彼女じゃない?良かったー!.....:フゥーすみません少々取り乱しました。」キリッ

「.....あゝ」ドンビキ

「やべえだろ？俺の妹。」

「妹ちゃんだったんだね〜ヤバいね。」

ガチャツ「ただいま〜」↑近所のオッサンの喧嘩見に行つてたトウコツ。

「あ〜」

「……………こつちが泥棒猫か〜！！！！」

「こんちくしょ〜！！！！」

〜白虎の誤解除消中〜

「なるほど、このお二人とはそういった事は何も無いのですね。」

「ソウデス。タダノドウキヨニンデス。」

「キュウキ、老けたな…」

「三十歳ぐらいに見える〜」

「でも安心しました。兄者が私以外の女に現を抜かしてないで。」

「ああ！そんな訳ないだろ！お前は俺のかわいい妹なんだからな！」

「兄者…！！」

「微笑ましいな。」

「仲良しさんなんだね〜」

「どうだ？今日の晩飯でも一緒に食べないか？」

「はい！喜んで！」

七凶目 終

「エッ!?!オワリ!?!オレノデバンハ!?!」 ↑今帰ってきたトウテツ。
終ったら終

八凶目

『四凶と“神”』

ビヤツコがキユウキ達の家遊びに来た日の夜。

「以上が現在の四凶の情報です。」

ビヤツコは真つ白で光り輝く神殿の一番大きな部屋にいた。

「今のところあなた様を攻撃しようとは考えていないようですが、どう致しましょう?」

ビヤツコがそう言うと、椅子に座っていた若い男が振り向く。その髪は金髪で短く、目は澄んだ青色。肌は健康的な肌色である。そしてなぜか『心拍数』と書かれたシャツとジーンズのズボンを着ている。

「僕もそこに行つて来ていい?」

「分かりました。ではそのように…今なんて言いました?」

「君のお兄さんの家、僕も遊びに行つて来ていい?」

「……………ハイ?」

「よし! 決めた! 明日行こう! そのためにも今日はもう寝よう! じゃ、おやすみ!」
タスタスタ

「いや、あの。」

「あ！護衛とか大丈夫だからね！」バタン

「……………えー」

次の日

キユウキの朝は早い。まず今日の新聞を取りに行くため玄関に行く。

「あー寝みー。」ガチャ

「ふーん。ここがビヤッコちゃんのお兄さんの家かー。」

バタン

「…。」

（誰だ？今の？……………変態か。）

（ちよいちよ！変態は酷いじゃない！キユウキくん！）

（コイツ！直接脳内に！）

「イヤマテ！なんで俺の名前知ってんだ！ビヤッコの事も知ってたし！誰だてめー！」

ガチャ

「やあ！初めまして。僕は“神”君が数千年前に刺し殺した神の後輩ってところ「ドラァー！」『ゴシヤア！』」

神と名乗る男がそう言い切る前にキュウキの右ストレートが男の左頬に打ち込まれた。

「ろかな。それにしても、いきなり殴ってくるなんて。」

「チツ、効いてねえか……」

「ひ、ひひ、酷いじゃないかかかかか。」ガクガク

「いや効いてるな。生まれたての子鹿みたいになってる。」

「ガフツ」バタツ

「あ、気絶した………………よし、今のうちに埋めとくか。」

そう言つてキュウキはどこからともなくシャベルを取り出す。

「待つて！嘘！今のギャグ！生きてる生きてる！」ガバツ

「……ならば死なす。」

そしてキュウキはシャベルを振りかざす。

「わー！わー！助けてー！僕は歌とお菓子が大好きなただの神様なんですー！」

「………神というだけで充分だ！」ニタア

「助けてー！この人目が本気だー！（泣）」

「……………ナニヤツテンダオマエラ…」 ↑あまりにもうるさいので様子を見に来たトウテツ。

（状況説明中）

「し、死んだと思った。」

「……………」

神と名乗る男が来たというこゝで居間に全員が集まっていた。

「なあ、キュウキ、本当にこんなのが神なのか？」

「こいつは俺の一撃をくらって数秒とはいえ立っていた奴だ。ただの人間じゃないのは事実だ。」

「どうする？塩酸でも飲ます？」

「今さらつと緑の子が恐ろしい事言わなかった!？」

「キニスルナ。」

「気になるわ！」

「おい、お前本当に神なのか？」

「そうだよ！神様だよ！なんでも知っているよ！たとえばキュウキ君はかっこつけて刑事物のドラマ見てるけど実は日本のプリキュ「ゴッ○イーター！」ガフツ！」

「なるほど、確かに神みたいだな。」

「なぜ…腹を…」プルプル

「だとすると私たちの敵か。」

「やっぱ塩酸飲まそうよく原液で。」

「ヨシ！コロスカ！」

「ギャー！優しく殺してー優しく殺してー！キリングミーソフトリー！」

「二「優しく以外はお望み通り！」二」

「いーーーやーーー！」

「兄者ーいるー？」ガチャ

「おう！ビヤツコか！いらっしやい！」

「神って名乗ってる痛い人来てない？」

「今命乞いしてる。」

「だと思ってきました。」

「ビヤツコちゃん！助けて！休み今までの倍にするから！」

「……まじで神なの？あれで。」

「……まじで神です。あれで。」

く神（笑）救出中く

「こ、怖かった。」ガクガクブルブル

「ハイハイ。泣かないでください。気味が悪いですから。」

「僕に慈悲はないの？」

「そいつわりかし馬鹿なのか？」

「そんなわ「神々の中ではぶっちぎりの馬鹿ですね。」…え？」

「そっかー、悪いけど、それ持って帰ってくんない？」

「分かりました。」

「待って！ 僕物扱い!?!」

「ハイハイ帰りますよー。」

「じゃあなー神様（笑）は別に元気じゃなくていいからなーwww」

「ちよーーー!!!」

く神界く

「ウウツ酷い、酷い」エッグエッグ

「しょうがないですよ。あなた様全然神様っぽくないですから。」

「今のでトドメ。」

「ハイハイ。」

「こうなったらあいつらの所にスザクちゃん行かしてやる。」

「え!？」

「よし! 決めた! 行かすっいたら行かしてやる! おーい! スザクちゃんー! いないの!？」
ドタドタ

「……嫌な予感しかない。」

八凶目 終

九凶目

『四凶と朱雀』

「ウワアアアアン!!スザクちやーん!!」

「どうしたんです? 神様?」

「四凶にいじめられたよー!」

「ハイハイ、どうせいらぬ事してしつぺ返しを受けたんですね…私が謝ってきますから、朝ごはん食べといてください。」

「ハーイ!……あれ? やつぱり僕が悪いの?」

慰めを求めたはずが、やんわりとお叱りを受けた神を余所に、火のように赤く、しかし一部青、緑、黄、橙の色をした髪、パツチリとした青い瞳のスザクと呼ばれた女性は下界へと降りていった。

「この度は本当に内の神様が失礼いたしました。」

「あ、いや、こちらこそ…少しいじめ過ぎたかなーと…」

「そこは別に問題ありません。園児に悪口言われて泣くような方ですから。」

「それもう神なの?」

そして四凶の家。キユウキはそのスザクからの神が迷惑をかけた事を謝罪されていた。

ただ、ちょうどお昼時だったため：

「ね〜キユ〜ウ〜キく〜ん、お昼作ってよ〜。」

「キユウキ、ハヨメシ、キユウキ、ハヨメシ。」

「私達が台所に立つても良いのかー!?!」

「うるせー!!!」

バカ丸出しな三人が飯を催促してくるのでなかなか話が進まない。

「いや本当にすみません：お気になさらず。」アハハ

「いえいえ、私の所も似たような感じですから：」

そう言つてスザクは遠い目になる。

「ビヤツコちゃんの仕事は出来るけどぶつちやけそれ以外はポンコツでこの前なんか、牛乳と漂白剤を間違えてコーヒーに入れて、それを神様が飲んで大変な事になりました。」

「それ確信犯なんじゃね?」

「そしてセイリユウ…あ、私の同僚です、そいつはそいつですぐ刀を振り回すせいで色んな所が傷だらけに…私が毎度止めるのですが…私、不死身なんですけどそれでも死を覚悟する羽目になります。」

「刀取り上げちまえ。」

「また同僚のゲンブつてのがいるんですが…ペンのインクを醤油と入れ替えてたり、シャンプーの匂いをシユールストレミングの匂いにしたり…一番被害に合うのは神様なんですけども…」

「あのクソ神の事だから嘗められてんだな…」

「まあ、その神様自身もいらぬ事しては自滅して、そして私が謝りに行くつてのがもうテンプレですね。」

「なんであれが神なの？」

「確か、くじ引きで神になったって本人が。」

「ちゃんと話あえよ天界…」

「本当、大変ですよ…毎日…キユウキさんの所は…？」

「ああ、そうだな…」

そしてキユウキは諦めたかなのような表情になる。

「コントン、緑の奴な、そいつは買い物行かせれば関係ない物を大量に買ってくる、掃除

をさせれば逆に散らかる、料理を作らせたならコントン曰くお友達が出来る。」

「最後のが本当に分からないです。」

「トウテツ、白いのな、そいつは食費が一番かかる、洗濯させればゴミが増える、料理はする前に食材がなくなる。」

「食べちゃうんですね分かります。」

「トウテツは仕事はしねえし、俺らの私物を勝手に売るし、薪割りさせればクレーターの出来上がりだ。」

「前半、ただのクズじゃ無いですか！」

「な〜んも言えない…」 ↑机に突っ伏してるコントン

「……トウミンシヨウ。」 ↑涙目になってるトウテツ

「↑フリーズしているトウコツ

く 神界 く

「なんか、デイスられた気がします。」

「ビヤッコちゃん！奇遇だね！僕もだ！」

「貴方は当然でしょう。」

「……」

結局、謝罪から横道にそれた身内の愚痴の言い合いはその日の晩まで続いたらしい…

「生ゴミを三角コーナーに捨てないのって何なんだ？」

「それは本当に謎ですよね！」

九凶目 終

十凶目

『四凶と絵』

「「バウムテスト?」」

「うん!面白そうだからやってみよう!」

ある日の事、コントンが人数分の紙とペンを持ってきてそんな提案をしていた。

「バウムテストってアレだろ?木の絵を書いてそれで性格とか精神状態やらを診断するヤツ。」

「まあ、ヒマしているし、やってみようか。」

「オレモ、ヤル!」

〜描き中〜

「よし!皆出来た?」

「出来たぞ。」

「オレモ!」

「なかなか上手く描けたぜ。」

「じゃ〜！私からね〜！」

「どんな絵なんだろうな。」

「タブン、カワイイ、エ、ダト、オモウ。」

「はい！これが私の木だよ〜！」

そう言つて出て来たのは写真かつて位にリアルな木の絵だった。

「わーお。」

「上手すぎやしないか？」

「エ？シヤシン？」

「えへへ〜♪ちよつと張り切り過ぎちやつたかな〜？」

「『そ、そうか。』」

「ツギハ、オレダ。」

「トウテツかー。下手だろうな。」

「紙が破られていないだけ奇跡だな。」

「トウテツの絵楽しみ〜！」

「…オレノ、エ、コレダ。」

トウテツが多少心に傷を負いながらも出したのは、絵本に出て来そうな、木の絵だった。

「かわいい！以外〜！」

「あれ？代役頼んだ？」

「それとも本のイラストを切って貼ったか。」

「キュウキ、トウコツ、アトデ、オモテ、デロ。」

「トウテツつて絵上手だね〜！」

「ソウイツテクレル、コントン、ダケ。」

「さて……私だ。」

「ああ……そうだな。」

「もうやな予感する〜。」

「ミギニ、オナジ。」

「……これが私の絵だ。」

トウコツの絵は……驚くほどに可も無く不可も無い普通の絵だった。

「最後、俺だな〜。」

「そうだね〜。」

「キニナルナ！」

「………そうだな。」

「ふふふ、遂に真打ち登場だな〜！」

「キュウキくん自信たっぷりだね〜！」

「タノシミミダ！」

「ああ…そうだな…楽しみだな…。」

「さあ！刮目せよ！これが俺の『木』だ！」

そこには、

木と言うよりただ糸くずが絡まったような絵しか無かった。

「……………え？」

「どうした？」

「……………木？」

「木。」

「……………糸くずじゃなくて〜木？」

「うん、木。」

「……………ホンキ？」

「本気で、木。」

『『全然木に見えねえ。』』』

「いやーこの幹の当たりがうまく描けてるよな！我ながら傑作だと思うぜ！」

『『自覚無しかよ！』』』

「ところでコントン。バウムテストの結果は？」

「あく分かんない！よく知らなかったし！」

「結果出せないだろキュウキの場合は。」

「ソウダナ。」

「なんでよ。」

結論、バウムテストは関係無くなってしまった。

そしてキュウキは無自覚で画伯だった。

十凶目 終

十一 凶目

『四凶と歌』

「兄者、カラオケに行きます。付いて来てください。」

「何だビヤッコ唐突に、まあ行くけど。」

突然家に来たかと思えばいきなりカラオケに誘って来たビヤッコ。キユウキは多少動揺しながらも賛成する。

「で、なんで皆来るのですか？ 兄者だけを誘ったはずなのですが。」

「キユウキ君の付き添い。」

「ミギニ、オナジ。」

「飯を奢ってくれるのだろうか？」

「ビヤッコちゃんとキユウキさんを二人きりにするのは危険だと思って…。」

いつの間にか、コントン、トウテツ、トウコツ、スザクの四人が乱nyじゃなくて合

流し、カラオケパーティーは始まった。

「誰から歌う〜?」

「言い出しつぺのモグモグビヤツコモグモグからだろうモグモグ。」

「食うか喋るかどつちかにしろ。」

「モグモグ。」

『『『『やっぱり食う方優先か：』』』』』』

「では、言い出しつぺの私が歌いましょう。」

「頑張れビヤツコちやーん。」

「コホン!では参ります!」

♪♪ビヤツコ歌唱中♪♪

「フウ…終わりました。得点は…:85点ですか。」

「うわ〜!ビヤツコちゃんお歌上手〜!」

「ありがとうございます。」

「では、次は私が歌わせて貰おう!」

「辞めとけ、トウコツ。」

「私が歌わせて貰おう!」

♪トウコツ歌唱中♪

「さあ!どうだ!」

「「「恐ろしく普通。」」」

「え」

「点数も62点…それなりだし…」

「上手くも無いし下手でも無いし。」

「フツウ。」

「コメントし辛いです、逆に。」

「すみません…普通でした。」

「…飲み物取ってくる…」

「次は誰だー?」

「ナラ、オレ、ウタウ!」

「頑張つて〜!」

「アア!」

♪トウテツ歌唱中♪

「ドウダ!92点!スゴイダロ!」

「ああ、ヘビメタ歌ったからな!」

「頭ガンガンします…」

「耳鳴りがまだしてます。」

「ドアを開けたらそこは爆音だった。」

「私はけっこう好きだよ？よくし！次は私が歌う〜！」

♪〜コントン歌唱中〜♪

「どうどう!?!上手かった？」

「おう！俺は好きだぞ！」

「個性的で良かったと思います！」

「コントン…点数なんだが「さっ！次行きましよう！次！」……27点……なんだが……」

そして1時間後。

「あ〜！たのしく〜！」

「アア！タノシイナ！」

「……………キュウキ。」

「ん？」

「何故歌わない？」

「……………聞きたいのか？すっげえぜ！」

「はい、兄者の歌は確かに凄いです。」

「んじゃあ、いくぜー！」

BOOOOOOOOGEEEEE

パリーン

パリーン

パパリーン↑店中のガラスが碎ける音

「な？」

「「た…確かに…」」

『耳栓持ってきていて良かったです。』

「ちくしょう！」

それからキュウキが歌を歌う事は禁止された。

十一 凶目 終

十二凶目

中国のとある山奥、

邪悪な妖怪達の住処。

その住人だった邪悪な妖怪達は死体となり、転がっていた。

「さて…行くかの…」

「御意…老師殿…」

青く逆立った髪に蛇のような目をした刀を持った男と、亀の甲羅を模した帽子をかぶり、金色の杖をつく幼い子供はそこから立ち去っていった。

『青龍と玄武』

「セイリユウとゲンブねえ…」

「はい…特にあの二人が…」

キユウキとスザクの愚痴の言い合いの会。以前互いの仲間に対する愚痴を言い合った際に割と気が合い、以来月十の頻度でおこなわれている。

ちなみにキュウキ意外の四凶は仕事（トウテツは探しに）行っている。

「ていうか、そんなヤバい奴らが神の使いで大丈夫なのか？クソ神とはいえ。」

「まあ…実力はありますからね…ただゲンブ様は…何というか…その…性格があれでして…」

「あれというのは性格が悪いということかの？」

「はい…ギャアー！ゲンブ様ー!!」

「そうじゃよーゲンブ様じゃよー♪」

そこにはゲンブであろう…幼い子供がいた。

「え？ゲンブ？これが？」

「初対面の相手を物品扱いとはなかなかの男よの♪」

「キサマ！老師殿を愚弄するとは！この不敬者が！」

「セイリユウも来てたんだ…」

今度はセイリユウと呼ばれた侍のような格好をした男が口を挟む。

「まあまあ、初めましてじゃの？キュウキくん、僕はゲンブ、こっちはそこで拾ってきたチンピラじゃよ。」

「老師殿、拙者はチンピラなどという低俗な者ではございません、侍でございます。」

「多分ツツコむ所そこじゃねえぞ？」

「いや…そのセイリユウは真面目なんだけど頭が…そのあれでね…」

「バカなんだな？」

「はい。」

「キサマ…拙者を低能呼ばわりするとは…そこになおれ！たたつ切つてくれるわ！」

「ほう…やってみるよ、侍野郎！」

セイリユウは自身の刀を鞘から抜こうとする、しかし…

「ぐっ…ん？…あれ…おかしいな…」

「どうした？」

「…刀が抜けん。」

キユウキとスザクは思いっきりずっこけた。

その後ろでゲンブは爆笑しており、その手には接着剤が握られていた。

「いやーホントに気づかないとは♪」

「まさか！老師殿がこれを!？」

「そうじゃよ、儂がお主の刀に接着剤を塗ったくったのじゃ。」

「なぜ！なぜ拙者の刀に接着剤を塗ったくったのですか!？」

「修業じゃ。」

「なるほど！」

「いやなるほどじゃないだろ。」

キユウキの中ではすでにゲンブは外道、セイリユウはバカというイメージで固定されていた。

「そもそも何しに来たんだ？お前らは？」

「スザクを迎えに来たんじゃよ。」

「頼まれていたからな。」

「…様付けしている人に迎え頼むってどうなの…」

という事でゲンブとセイリユウはスザクを連れて天界に帰って行った。

「また来るからのー♪」

「…マジかよ…」

十二凶目 終

十三凶目

『四凶と引きこもり』

「早速だけど僕の家には遊びに来ない？ キュウキ君！」

「トウテツークソ神がお前に食われたいってー」

「せめてイエスカノーで答えて！」

ある寒い日、神が再びキュウキ達の本に来ていた。

扱いは相変わらずだが…

「あのな…逆に聞くけど俺らがお前の家、つまり天界の中に入って大丈夫なのか？
と
いうか、俺は過去の事もあつて行きづらい」

「キュウキは未だ神殺しの罪で追われているはずだからな」

「あーその辺は大丈夫、僕の所に他の神の使いが来ることはほとんど無いからね」

「…干サレテイルンジャ…」

「他の皆も全然大丈夫だから！ という訳でレッツゴー！」

「ダカラ干サレテ」

（天界（神の家））

「と、いうことで四凶の皆を連れて来たよ！」

「クソ神よくやった！ 兄者！ 早速私の部屋に行きましよう準備は出来ています！」

「何のだよ」

天界に到着してすぐ、ビヤッコのぎりぎりなボケを軽くいなし、キュウキ達は広間へ案内される。

「おお！ 久しぶりじゃの！」

「出た！ ショタジジイと……」

「久しいな……キュウキよ……」

「馬鹿侍！」

「貴様！ 今度こそたたつ切つて……何故に拙者の刀が竹輪に!？」

セイリユウとゲンブも相変わらずのようだ……

「いやーそのー騒がしくてごめんなさい……」

「大丈夫……分かつてる……苦労してる事は……」

スザクも色んな意味で相変わらずらしい。

「で？ クソ神、俺らが呼ばれた理由は？」

「お！ キュウキ君は勘が鋭いね！ そう！ 君たちにはとある封印を解いてほしいんだ！」

「封印？ 何それ？」

「コントン、タブン、クダラナイコト」

「…それがそうとも言えないんだよね」

「「「？」」」」

「全員移動中」

キュウキ達とはある一室の前に来ていた。

「？ 魔術的な結界などは感じれないが…」

「物理的な封印、って訳でも無いみたいだけどな…」

「…まあ、その、ね、ようは…」

引きこもりなんだ」

「さて、帰るか」

「興味なくい」

「カエツテ、メシクツテ、ネル」

「爪を切るから帰らせてもらう」

「待つて！ お願いだから！ 僕らじゃ無理だったんだよ！ だからこそキュウキ君！

労働依存症の君が外に出て働くことの「誰が労働依存症だ首から下とバイバイするか

？」…サーセン」

「で？ どんな奴なんだ？ そのヒツキーくんは」

「なんだかんだで付き合ってくれるキュウキ君好き…ともかく実力や能力自体は四神獣は超えてるんだ、だけどメンタルが問題でね…今の四神獣達と馬が合わなくて引きこもっちゃったんだ…」

「…なるほどね…よし！ 良い方法がある」

「おお！ さすがキュウキ君！」

ガラツ 「入るぞー」

「まさかのドストレート！」

部屋の中に入って金色の竜のような角、鱗が生えた青年が本を読んでいた。

「？ え？ どちら様？」

「外出ろ、いや出す」

「え」

そう言うときユウキはその青年の首根っこを持って部屋の外に引きずり出す。

「ほら、出してやったぜ」

「「「「「いや、強引！」「「「「「」」」」」」」

はたしてこの青年は何者なのか、何故、神はこの青年を出したかったのか…

次回へ続く。

な親の仇を見るような目辞めて」

「コントやつてる場合か、後なんかこいつがすげー震えてて俺ケータイみたいになつてんだけど」ブルブル

キユウキの言うとおり青年は全身を震わせていた、その目元には涙がたまっている。

「あーその子は黄龍っていつてね、ちよつと…いやかなりの人見知りでね…できれば離してあげて…」

見かねたスザクの申し出によりキユウキは青年、黄龍を離す。

「怖い…怖い…知らない人達怖い…」ガクブルガクブル

「…コイツ、ホントニ、ツヨイ？」

「ひいひい!! 食べないで! 殺さないで!」

「」

トウテツはメンタルに会心の一撃をくらった。

「人見知りつつうかビビりだな…」

「怖くないよ〜えへ〜」

コントンが可愛らしく笑いながら黄龍に近づくと、しかし黄龍はどんどん後ずさつていく。

「え、どうしたの黄龍君、コントンちゃんのどこが怖いのか? この神に相談してみ?」

「…なんと言うか…あの笑顔の裏にとんでもない狂気を感じて…」

「マジでか」

「では、私の番だな！ 黄龍ー、ルールルルーアベシツ！」

トウコツがどこかで見たような感じで近づくと同時に黄龍は見事な右ストレートをトウコツの頬に打ち込んだ。

「何故だ！」

「ごめんなさい、何か貴方からは…その人の物を勝手に売ったり人のケンカで酒を飲んだり薪割り場をクレーターにしたりしそうな雰囲気を感じたんで」

「!？」

トウコツは誰からもこんな扱いらしい…

「ともかく！ クソ神、何でこいつが部屋から出る必要があるのか教えろ！」

「ああ…そういうえばそんな話だった…」

「ワスレテタノカヨ…」

キユウキは多少イラつきながらも神に詰め寄る。

「まあ、黄龍君はすごい能力を持っていてね、全ての魂を癒し悪しき呪いを解く力さ、わかりやすく言えば味方全体HP全回復&悪い状態異常解除するヒーラータイプだね！

「

「クソ神にしちやあ的確なのがムカつくな」

「なんでさ…で、今回黄龍君を部屋から出した理由なんだけど…」

「実は今日人類滅亡の危機なんだ」

「頭にウジでもわいたかクソ神」

「ホントの話だよ！」

「今日つたつてもう昼過ぎだぞ？ 今更…「ハイイ！ 神さま下界テレビ登場！」聞けよ」

「これは人間界の様子をウォッチングできる優れもの！ って事でドン、今の人間界の様子」

「はあ？ 今の人間界の様子？ そんなの…」

「キユウキは、いやそこにいた神以外の全員が言葉をうしなった。画面に映っていた人間界は、

大地はさけ、

海は荒れ、

大嵐により町は壊滅状態となっている。

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図であった。

「人類滅亡の危機、現在進行形！」

「何でもっと早く言わねえ！」

「ヒデブツ！」

神はキュウキにぶん殴られた。

続く

十五凶目

『四凶と滅亡』

「前回までのあらすじ！ 四凶の四人は魔王エイリアンボーンを倒すため、冒険の旅に出たのであった！」

「いきなり大嘘いってんじゃねえよ」

、本当の前回までのあらすじ

人類滅亡の危機

「本当のあらすじが雑…」

「さつきから兄者とクソ神は誰に向かって話しているのです？ …」

コントはここまですて…

「とにかく！ 一体どういう事だクソ神！」

「んーそーさなー原因はーキュつくんの知ってる人かなー「お前か」ちゃうわ」
「んじやあ誰なんだよ、原因はさ…」

「えーネタバレにならないー？ いきなり原因分かっちゃうつてつまなくな、わかつたわかつたからね、爪楊枝と接着剤持って僕の股間を覗まないで」

「とにかく！ 人類滅亡の危機を招いた張本人は！ ズバリキュウキ君の友達の想ちやんでしよう！」

一同は沈黙に包まれた、想はキュウキの友達の少女。

コントン、トウテツ、トウコツはその名を聞くと同時に驚愕の表情を浮かべる。

そして沈黙を破ったのは、ビヤツコだった。

「…お兄ちゃん？ 誰、想って」

「ビヤツコちゃんここから結構シリアスに入っていくから黙っててねー」

くサイドキュウキく

クソ神のその言葉に俺は耳を疑った。

あの想がこんな惨状を引き起こしたのか、

優しく、明るく、感情豊かな彼女が何故…

いや…俺はとづくにいつかこうなる事が分かっていたのかも知れない。

あの日、あの男と出会い…

あの日、あの言葉を受け…

あの日、想と出会った日からずっと…

『タイセツナ…ナツタトキ…デスネ』

俺は知っていて、分かっている…それでも…

この惨状は、俺が招いた結果かもしれない

「はい、キュウキ君の一人語りはここまでとして…」

「コ、ラ」

「で、どうする？」

「…行くしかねえんだろ？」

「ウイ！」

「コントン、」

「ん〜？」

「トウテツ、」

「オウ…」

「ビヤツコ、」

「はい…」

「スザク、」

「うん…」

「バ…セイリユウ、」

「貴様…」

「ゲンブ、」

「ふむ…」

「黄龍、」

「は、はい…」

「……………神」

「何かな？ キュウキ君」

「柄にも無くさ…救うぞ…人類をよ…」

「「「「「おう！」「」」」」」

そう言うときユウキ達は、人間界へと降りていった。

「あれ？ 私は？」

トウコツは置いてかれた。

く人間界く

その少女は苦しんでいた、全身を焼かれ、裂かれ、溶かされるような激痛を味わいながら、死ぬことすら出来ず、自らの能力で慣れ親しんだ町を、大地を、海を、空を破壊していた。

『Aaaa! ! ! Uaaa! ! !』

その少女は人では無い、しかし純粋な心を持っていた、

その少女は人では無い、しかし優しくけなげだった、
その少女は今、

『Uuuu…タス、ケテ、キユ、ウキ、サ…ン』

神殺しの獣の名を呼び、助けを求めていた…

続く

十六凶目

『四凶と決戦』

前回までのあらすじ

人類を救う為にキュウキ達は人間界へと戻った。

トウコツを犠牲として…

「いや、生きてるからな!？」

「ひでえな…」

キュウキは人間界の惨状を見て、つぶやく。

「でも…それよりひでえのは…」

キュウキは視線を上に向ける。

『A a a ! ! ! U u u ! ! ! U a a ! ! ! 』

「想…」

そこには、膨大などす黒いオーラに包まれ悲痛な叫びを上げる想がいた。

「…」

「キュウキ君…覚悟は出来てる？」

「…何のだ？」

「最悪彼女を殺す覚悟は？」

「…ああ…」

「なにかかっこつけてる所悪いですけど!?! 被害抑える為に私達がめちやくちや苦勞して
るんですけど!?!」

暴風をトウテツとビヤッコが打ち消し、

津波をコントンとセイリユウが吹き飛ばし、

地割れをトウコツとゲンブが押さえつける。

惨状による怪我人達を救出しているスザクが何もしてないキュウキと神にツッコむ。

ちなみに黄龍はめちやくちや震えながら怪我人達に治療を施していた。

「悪い悪い、さてと…そろそろ行くか…」

「いつてらっしゃいキュウキ君、彼女を止めていいのは…君だけだ」

キュウキは大きく空に飛び上がり、想の元に向かう。

「…兄者…」

ビヤツコはそれを複雑な顔をしながら見送っていた。

「よお…想…ひでえ面してんぞ…」

『U a a a…』

「…なんだよ…言いたい事あんなら分かるように言えよ…」

『A a a a…』

「…本当に俺が分からねえのかよ…」

『…U u u u…A a a a…G a a a! ! ! !』

「…ちくしょうが…」

キュウキがどれだけ声をかけても想は叫び声を上げるだけで、まるでキュウキのこと

が分かってないようだった。

「悪いな…想…たとえお前を壊してでも…止める」

キュウキは頭の中である男…想の生みの親でもある男の言葉を思い出していた。

『タイセツナヲマモレナクナツタトキガタノシミデスネ』

「…ちくしょう、ちくしょうが…」

『G a a a ! ! ! A a a a ! ! ! 』

想は叫び声と共に大量の槍をキュウキに向かって放ってくる。

「ドラララララララララララララララララララララララ！」

キュウキはその槍を全て殴り砕く。

『A a a a ! ! ! 』

今度は巨大な腕が現れ、キュウキを握るつぶさんと襲いかかる。

「ドラア！」

キュウキはそれを押し返し、

「ドララララララララララララ！」

高速の連打により粉碎する。

『Geeee! ! ! Aaaa! ! !』

想はキュウキに攻撃が効かない事が腹立たしいのか、それとも体に走る激痛に苦しんでいるのか、再び悲痛な叫び声を上げる。

しかしその瞬間、キュウキは想の目の前へと一気に距離を詰め、

「……ゴメン……さよなら……想……」

想の腹を手刀で貫いた。

「……ありがとう……キュウキさん……」

想の弱々しい声と共に、恐ろしい惨状は収まり、人類滅亡の危機は幕を閉じた。

「…想」

「キュウキさん…ご迷惑を…」

「喋んなよ…」

「でも…」

「いいから…」

「キュウキさんは…あの人とはどこで…？」

「…わかった…教えてやるよ…だから黙って聞いていろよ…」

こうしてキュウキは想に自身の昔話、そしてあの『悪魔』との出会いを語り始める…

続く

十七凶目

『キュウキとその仲間達』

「答えろ…答えろよ！ サン||ジェルマン！ ！ ！」

兄者の悲痛な叫びが空に響く。

兄者のそばには動かなくなつた一人の少女。

兄者の近くに私以外の女がいるのはいつもなら納得いかない…
だけど…

「兄者…」

「安心してキュウキ君！ 僕が命をもう一つ持ってきた！」
そう言ったクソ神は兄者からのコークスクリューを顎にくらった。

くサイドキュウキく

「何いきなり頭の沸いたこと言ってるんだ？ お望みなら文字通り沸かしてやってもいいんだぞ？」

「キュウキくーん、僕を殺す事には何か抵抗は「あるわけ無いだろ？」…ウツス…」
本当に…今はお前の戯言を聞けるような気分じゃ無いんだよ…

「何よりなんだ…命を持ってきたって…命は道具とかじゃ無いんだぞ？」

「チツチツチツ、キュウキ君、あの光の国の炎上頭隊長だってほとんど同じ事を言ってるだよ？」

「だとしても…お前が出来るってのかよ？ あとやめてやれ炎上頭隊長は」

「え、出来るよ？ だって僕、最高神だもん、そのぐらい簡単に」

「え？ 今なんて…」

「んじやいくよ！ エイエーイ！ ！ ！」

「掛け声」

神が奇声を上げながら想に手をかざすと、白い光が想を包み込んだ。

そして光が止むと同時に

「…あれ…私…確か…」

「嘘…だろ…」

想は再び目を開けた。

「黄龍くーん、治療と悪魔の支配とかの諸々解除お願い」

「か、噛まない？」

「噛まないよ」

と、同時に黄龍による治療が始まった。

「さてと…クソ神、お前さつき何て言った？」

「？ 何のこと？」

「とぼけんな…さつきお前は自分のことを最高神だと言った、違うか？」

「違うないよ？」

「なら…何で想のことを…」

「最高神にも出来ない事とかあるんだよ、僕に出来るのはやり直させるだけだからね」

「つまり…想の時間を巻き戻したのか？」

神は無言で頷く。

「…黄龍がいないと想はまた…」

「死んでただろうね、怪我を治した訳じゃないし」

キユウキは神に向き合う。

「想の死を…無かったことにか…」

「気にくわない？」

「…一っただけ言わせて貰うぞ…」

「…うん」

「命…持ってきてねえじゃか」

「ごもつとも…あ、治療終わったみたいだね」

「他の皆も終わったようだな…」

「キュウキさーん!? この人なんかすつごい震えてるんですけど!?」

「ガクガクガクガクガクガクガクガクガク」

「キュウキー! 終わったぞ!」

「兄者ー! ご褒美にここじやあ言えないような事を」

「キュウキくーん! 私頑張ったよく! 頭なでなでして〜!」

「キュウキ、ハラヘツタ、オレ、メシクイタイ」

「神様ー、大体終わりましたよー」

「老師…私は役に立てたでしょうか…」

「んーまあ、よく竹輪で頑張ったの」

「さてと…帰るか…俺達の家」

「だね…」

こうしてキュウキ達は…四凶達は自らの家に帰っていた…

「こうなっている事を考えておくべきだった…」

「ごめんなさい…」

ただしその家は想が起こした災害により、倒壊していた。

「俺は…弱い！」

「いや…また建てればいいだけだろ…」

「新しいお家〜！ 皆で建てよ〜！」

「ガンバツテ、ミンナデヤレバ、ハヤクデキル！」

「…ま、確かに…」

「えー、何でしょーこの茶番感…」

こうして四凶（+想）による楽しい新居建築が始まったのである。

「サン||ジェルマン…俺はお前に言われた事を今でも覚えてる…確かに今回は俺は大切

な物を守れなかった…だけど…

俺は一人じゃ無くなつてた、無邪気な奴、大食いな奴、人の物勝手に売る奴、バカな奴、外道な奴、苦勞人な奴…そして妹とクソ神…俺が守れきれない、そして守れなかった物を…守つてくれた…

悪いけど…俺はお前から見て弱くても構わない…その弱さを補つてくれる奴ら…がいた…クセえ話だけだな…

でも…多少クサくても、虫のいいことでもさ…救われたんだ…俺も…想も…そしてこのせか「スターフィンガー！　！！」ドスツ

キュウキが振り返るとそこにはキュウキにカンチョーをしている神がいた。

「いやー隙だらけだよ？　キュウキ君がそんなじゃ僕心配しちゃ「ドラァ！」ギヤム！

「

「てめえが死ぬまで殴るのをやめねえ！　！！」ズドドドドド

「ギヤー！！！！」

「あれ…ほつといて大丈夫なんですか？」

「「「「うん」」」」」

「…そうですか…」

「待ちやがれクソ神！ 最高神つてのはやっぱ嘘なんだろ！」

「待つてそれは本当なの！」

「うるせえ！ 今日こそその顔面地中に埋めてやる！」

「ちよいちよいちよいちよい！ それいつぞやのシャベルじゃない!? ねえ、誰か、助け

て、ちよつとー!?!」

「これからも彼らはこの日常を描いていく…」

『四凶の日常絵巻』を描いていく…

「ジャツジメント！」
「ドスッ
「僕のおしりがー!?!」
」

四凶の日常絵巻　　く第一部、完く

十七・五凶目

『幕間の四凶達』

想の暴走から約一ヶ月後、

想には一応、神の加護的な物を付けておいてあるらしく、もうあんな事は無いらしい

…

あのクソ神のことだから信用出来ねえけどな…

そして…

一度クソ神からある提案をされた事もあった。

それは俺の、『キユウキ』が生まれた理由、あの、

『神殺しの事件』を無かった事にするという提案だった。

確かにあの「やり直す」力があれば、あの日をやり直し俺はキレイなままでいれたかもしれない…

それでも俺はその提案を断った。

そしてクソ神は俺がそう答えると分かったような顔をしていた。

少しムカついたので強めにしげいたら、「やり直したーい！」とか言ってた。

想も元気にしている。

だが、なぜだかキュウビの所で住むことになってしまった…

あいつの家…大丈夫なのか…

ところで、俺はある事態に直面している。

それは…

「びびっぴびっ…」

日本に行くことになっちゃった…」

商店街での福引をやったら一等が当たってしまった…

しかも最大四名様まで…

びったり過ぎる…

だが…

「あいつらが日本に行って…大人しくしている訳なえよな…」

「心外だな」

「キュウキ君酷い」

「オトナシク、デキル！」

…

「不安だ…」

「「おこ…」」

だがしかし当たってしまった物はしょうが無い：
行くしか無いのだから：日本へ：

く日本く

「た、助けてくれ！ 俺はなんも悪い事はやってねえ！」

路地裏、そこには目が一つしかない男が青年に命乞いをしていた：

その男を睨み、手のひらを男に向けているその青年は、まるで養豚場の豚を見るような目をしていた。

「そうか…一つ目が消されたか…」

「はい…」

その男の前には、

巨大な猿のような男と青白い髪と真っ白な肌の女が跪いていた。

「必ず仇はとれ…何よりこの神野組にケンカを売った事を…」

男は手にしたキセルを回す。

「後悔させろ」

「ハッ！」

その頃神界

「ねえービヤツコちやーん」

「何でしょう」

「旅行に行きた「仕事をしてください」言わせてよ…最後までさ…」

「どのぐらい仕事がたまってると思ってるんですか、早く片付けないとその頭皮えぐりますよ？」

「恐ろしいこと言わないでよ…あ、そういえば」

「…何です？」

「キュウキ君日本に旅行に行くみた「何をぐずぐずしているんですか！ 旅行の準備をしますよ！」分かりやすいな」

四凶の日常絵巻　　↳第二部・日本編　　へ続く

四凶の外伝絵巻

外伝壺凶目

『キュウキという四凶』

「え？子供の頃？なんでまた？」

今日はいつもの3人は居らず、家事もほとんど終わった昼下がりに。

珍しくお客さんが来ていた。もちろん人間じゃない。

「はい！キュウキさんの子供の頃！気になります！」ワクワク

名前を想（シアン）。とある事とで知り合った近くに住んでいる女の子。なんでもとある悪魔が作った薬に魂が宿って生まれた存在らしい。能力は自分の感情を具現化できる事。前に不本意で泣かしちまったら、家の周りが豪雨になって洗濯物が台無しになったのはいい思い出だ。

「まー暇だしなーいいぜー。」

「ありがとうございます！」パアア

「えーとっただしか…あれは…」

今から約数千年前。

神に仕える白い虎の一族がいた。

のちに四神獣の白虎と呼ばれる者達である。

そして、次に神に仕える事となったのは、まだ幼い兄妹だった。

兄はひねくれたところはあるが、妹の面倒見が良い兄として知られていた。しかし嘘を悪い事と認識しておらず、正直者を極端に嫌う問題児でもあった。

妹は兄が何より大切だった。兄が好きだった。兄を愛していた。それ以外の相手にはほとんど口を開いた事は無かった。

最初こそは反対する者達もいたが、神が決めた事は絶対だった。

そして数年後。

兄妹は神に仕え、神の教えを受け成長していった。

人化の術を使えるようになったり、

初めて妹が兄以外の存在に口を開いたりなど様々な事があった。

しかし、この頃から兄は神の教えに疑問を感じるようになっていた。嘘をつく事が、正直者でない事が本当に悪なのかと。

そしてある日。

妹が人間の世に行くこととなった。

地上の汚れを払うため、

妹はずっと一緒にいた兄の元を初めて、離れていった。

そのわずか数時間後。

兄は自らが仕えていた神を刺し殺した。

兄は知ってしまった。

自らが仕えていた神が人間達のためになるという理由で生け贄を捧げさせていた事。それは人間達のためなんかではなく、自らの汚い欲望を満たすためだった事。

妹を人間の世に行かせたのは、ただ邪魔だったため。

兄は他の神々からの追跡を逃れ、人間の世界に逃げ込んだ。

兄は確信した。

嘘をつく事が悪なのではない。

善人の皮を被り、自らの欲望のために、嘘を利用する事が悪なのだ。

そして正直者を名乗る者は皆そうであると。

そして兄は気づいた。

自らの体に変化しているのを、

白く美しかった肌は青く染まり、

黒と白の二色だった髪の毛は黒と青の髪に、

背中から青く、大きな翼が生えていた。

兄は人間の世界でたくさん正直者を殺してまわった。

この世界から悪を断つため。

そして自分を貫くために：

いつからか兄は人間達からこう呼ばれるようになった。

、キユウキ、…と

「て、感じかな。」

「思った以上に…重い話でしたね…」ドンヨリ

（なんか…想ちやんのまわりが曇ってる…）

「まあ気にすんな！もう昔の話だしさ！」

「それもそうですねー。」アハハ

「ところで、もう外暗くなってきたるぜ？大丈夫か？」

「え？あ！本当ですね！もうこんな時間！遅くまで失礼しました！また遊びに来ますね

ー！アセアセ

「ああ！いつでもいいぜー！またなー。」

「それでは、さよならー！」 スタスタ

「あいつ…彼女いたのか…」 ↑仕事探しから帰ってきたトウコツ。

この後、コントンとトウコツから質問攻めにされる事はこの時のキユウキは知らなかった…

外伝壱凶目 終

外伝弑凶目

『トウコツの過去、冷徹との邂逅』

二千年前、キュウキが神殺しの罪を受け天界から追われる身となった頃のお話。

中国のとある小国、その王城の玉座には本来の王とは違った者が座っていた。

「はあ…退屈だな…」

それこそそのちの四凶の一人、トウコツである。

「おい、そこのお前とお前…殺し合え」

トウコツは近くにいた家臣であろう男二人にそう命ずる。

「え！ あ…何故私達なのでしょうか？」

「何より何故そのような事を…」

「やかましい、さっさとしろ…私が直接やっても良いんだぞ？」

そういつてトウコツが男二人全身からおぞましい殺気を放ちながら睨む。

「はい！ 喜んで殺し合わせていただきます！」

その殺気に飲まれた男二人はそう叫んだ後、腰に下げた刀を抜き殺し合いを始めた。

「ふふ、中々良いな…酒がさらに美味くなる…」

トウコツが何故この小国の玉座に座り何故王のように振る舞っているのか、真相は単純な物でトウコツが本来の王を抹殺しその玉座を奪っただけである。

「と、トウコツ様…お客様の起こしです…」

「ん？ ああ…少しだけ待て」

その瞬間殺し合いをしていた男二人の首が宙を舞った。

頭を失った体は力無く倒れていった。

首をはねた手についた返り血をトウコツはうつとりとした表情で舐める。

「ん…ふう…やはり血の味はいい…よし、通して良いぞ」

「は…はい…」

そう言うのとトウコツは再び玉座に腰を下ろす。

トウコツの前に客人が連れられてくる。

その客人は黒い和服姿で、その目はつり上がりまるで亀のようである。そしてその額

には角が一つ生えている。

「初めましてトウコツ様、私日本の地獄から参りました、鬼灯と申します」

「…ほう…その鬼灯殿がこの私にどんなご要件で？」

「少しばかりお話がございます」

「言ってみろ…内容次第では…覚悟をしておいた方が良いでしょう？」

トウコツは本能で、この鬼灯という男がただ者では無いことを察していた。

「はい、実は中国地獄に来る亡者の数が不自然に増加しており、その原因がトウコツ様と関係しているらしい…との事で増加した亡者の対応に追われる中国地獄の方々の代理としてお話を伺いに参りました」

「…なるほど…そう言う事か…ああ、関係している所か私が原因だ」

トウコツの悪びれる様子の無いその態度に鬼灯の目つきがわずかにきつくなる。

「ふふふ…その顔、私に今の生活を辞めろと言いたそうだな…良いだろう、鬼灯殿…この私と決闘を行おう」

「何故そのような事を「貴殿がこの私を打ち負かす事が出来れば…その時は私はこの小国から出て行き、人に害をなすことを自重するとしよう、どうだ？」悪くない話だろ？」

「…はあ…嫌と言つても無理矢理にでも戦わされそうですね…分かりました」

二人は城の中庭へと移動する。

「武器は何を使用しても構わない…その呪いの金棒でもな…」

「この金棒をご存じでしたか…」

「ああ…いつか手に入れたかったが…よし、私が勝てばその金棒を貰おう…拒否権は無
い」

そう言うのとトウコツは鬼灯に飛びかかり、首をめがけ手刀を繰りだす。

しかしその手刀は鬼灯の腕により阻まれる。

「ほう…止めるか…まあそう出ないと面白く無い…」

「言っておきますが…手加減はしませんよ…?」

「構わない…むしろそうしてくれ…その方が私は楽しめる…」

その言葉を皮切りに激しい打ち合いが始まった。

それから三時間後…

立っていたのは鬼灯であった。

「まさか……ここまで私を追い詰めるとはな……」

トウコツは満身創痍となり、至る所から血を流していた。

「しかし……良い……体から血が流れ出るこの感覚……久しいな……」

だがその顔には悔しさや苦しみの感情は無く、代わりに恍惚とした表情を浮かべていた。

「はあ……そういう感じの人だったんですね……貴方……」

鬼灯はどこか呆れたような表情でそうつぶやく。

「ふっ……約束は守ろう……私はこの国を去る……中々楽しかったが……しようが無い……ところで鬼灯殿……相談がある……」

「? 何でしょう」

「……私とつがいにお断りします」……そうか……」

その後トウコツは言葉通りその小国から去り、しばらく大人しくしていた為、中国地獄にての不自然な亡者の増加は解消された。

国を去り、三日後…

(ああ…やはり傷が深かったのだろうな…もう体が動かない…)

トウコツは山奥の道に倒れていた。

(構わない…こうなる事は覚悟していた…私のような者はいつか必ず滅びる…それが定めだ…)

そしてトウコツはゆっくりとその両目を閉じた…

故に気づけなかった、青い肌の羽根が生えた青年に背負われどこかへと連れて行かれた事に…

外伝式凶目 終

外伝参凶目

「結構前の事だけど日本から帰ってすぐに頼んだマイホームが出来てる頃だねえ、楽しみだよ」

彼女は九尾の狐。キュウキとは旧知の仲である。

そんな彼女は自身のマイホーム建設地に来たのだが…

「ひっ…酷くこざつぱりしてるー!?!」

そこには大工が一人と所々木材が置かれている更地しか無かった…

『九尾の楽しい木造建築』

「ちよつとお!? 大工さん! 私の家全然出来てないよお!? というか全然出来ておま

へんがな!」

「そりゃ、九尾さん費用ケチって俺一人しか雇ってないじゃないですか」

「良いじゃないか」

「良いけど…完成まで後三十年かかりますよ?」

「えーっ!? 私もう出来てると思ってキュウキの坊やに招待状送っちゃったよお!」

く四凶の家く

「郵便です」

「誰からだ? うっわ…九尾からだ…」

『キュウキの坊やへ、マイホームが完成しました、お土産を持ってきなあ、良いお土産を持ってきなあ。P s きつねうどんに狐は入ってない。』

「うぜえ…まあ行ってやるか…二、三秒見てすぐさま帰ろう…」

「早く建ててくれない!? 小屋でいいからさあ!」

「小屋で良いんすか!?!」

「良いの! 明日まで作るのさあ!」

く翌日く

「九尾の家ってどんなかな…あ、お土産忘れた、いいや雑草で、あと小石」

「地図によるとこの辺なんだけど…まさかこれじゃないよな…なんか『KYUBI』とか書いてあるけど…ここに九尾がない限り俺は信じねえぞ」

「ルララー♪」

「いたよ…なんか歌ってる…てかギターの位置低っ…」

「おお！ 来たかい、キュウキ！ 待ってたよお、弾き語りしながら♪」

「弾いてなかったぞ」

「実は弾けないのさあ」

「じゃなんでそんなに誇らしげに首から下げてんだよ」

「なんだい…良いじゃないか…ギターなんか辞めてやるよお！」バキヤアアン！

「破壊したー！！」

「それよりマイホーム！ さあ入って入って、ちよつと獣臭いけど入って入って！…と

待った、お土産持ってきたかい？」

「ああ…やつぱいる？」

「いるに決まってるじゃないか！ 一種の礼儀つてもものだろお？」

「じゃはい」

「ふふふ…楽しみだねえどんななのか…おうふ…」↑雑草と小石

「悪かったって、そんなへこむなよ…」

「草って…石って…」

「それより良い部屋だな、落ち着いてて」

「本当かい!? キュウキ、家を見る目があるねえ!」

「お、おう…そうか…」

「さ! お菓子食べなよお! 少し獣臭いけど」

「いらねえよ」

「なんだい…美味しいのに…マツズ!」

「不味いんじゃないかよ」

「タルギヤル鬼神の中身みたいな味がする…」

※タルギヤル鬼神とは中国に伝わる卵の姿をした妖怪。

「キュウキ、お茶入れてきてくれないかい?」

「しゃーねーな…」

「あー獣臭かった…台所としては致命的だろ床ギシギシいつてんで…ん? 風呂…少し見てみるか」ガチャ

「…パトリオット」↑キョンシーの格好をした中年男性

「きつ姉ー!!! 風呂に変な野郎が!」

「ああ…あの子はキヨンシー松本さんっていうのさ、キユウキのことも伝えてあるよ」
「伝えてないな! パトリオットって言われたぞ俺!」

「じゃあ後で訂正しとくよ、ペスでいいかい?」

「良いわけねえ、はいお茶」

「ありがとう…なんだかんだでキユウキは優しい子だねえ…」

「じゃ、俺帰るから」

「ええ、泊まっていきなよお、布団もあるよ? きつ…獣臭凄いいけど」

「オメエの使い古しじゃねえか…この家全部獣臭いじゃねえかよ…」

「ねえ? 昔みたいに枕投げして遊ぼうじゃないか…一生のお願い、ね?」

「…分かったよ…じゃその枕貸せ」

「はい」ポスツ

「じゃいくぜ、はい」ポスツ

「じゃ、そういう事で「逃がすか」デスヨネ」

「ワンスローだけとか…さすがにないよキユウキ…」

「でもよ、あんまり本気でいくと怪我すんぞ?」

「見くびらないでほしいねえ！ 私は九尾の狐だよ！ 枕でも石でも華麗に避けて」
k、じゃいくぜえー！…ええ」

「全力投球!!!」 コイシブンナゲー

「危なっ！」 コイシヨケー

ドスッ

「…ヒイ…」 カタカタ

「おおホントに避けた、じゃもう一発いくぜ」

「やめて！ 私が悪かったから！ 壁にぶつきさつたよ？ ただの小石が！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「？ 地震か？」

「あらあ…今の衝撃で家が崩れるみたいだねえ…」

「崩れるのかよ…」

「即席で作った掘っ立て小屋だからねえ…」

「…だと思っただ…」

ズドオオオオオオオン…

「キュウキ…私は諦めないよ…ギター頑張っ続けてみるよお…」

(知らねえ…)

外伝参凶目終

外伝肆凶目

『四凶の短編絵巻』

「気になってたんだけど」

「キュウキさん、少し気になってたんだけど」

「何だよスザク？ クソ神への態度は神様だからとかじゃなくてあいつがムカつくからだけど？」

「うん、それは分かっています、じゃなくて、前にキュウビさんから聞いたんですけど…」

「その時点で俺の黒歴史関係じゃねえか」

「キュウビさんとは小さい頃一緒に暮らしてたんですよね？ けどもキュウキさんは神様…先代の神様のところで長い間すごしてから人間界に来たって聞いて…なんか矛盾していませんか？」

「別に矛盾はしてねえよ？ 確かにそこそこの期間神界ですごしてたけどさ、出て行った時は人間でいう10歳の頃だぜ？ キュウビが小さい頃って言ってもおかしくねえよ」

「なるほど…後、きつ姉って呼んでたのは本当なんですか？」
「ちよつとキュウビ殺りに行つてくる」

〜コントンのお仕事〜

「いやー、コントンの仕事を見学出来るとはな」

「しかしコントンはどんな格好をしているんだ？ 私はゆるふわ系だと思う」

「オレモ、ソウ、オモウ」

「ていうか…コントンはモデル向いてないような…じつとしてるか？ 撮影中とか」

「あ！ みんな〜！」

「あ、コントンやつと来た…か…」

「フツフ〜ン！ どう？ 似合う？ バニーガールっていう格好なんだって〜！ あれ

？ キュウキ君どこ行くの〜？」

「今回の撮影の関係者を叩きのめしに行つたぞ…」

「コントン、トリアエズ、ウエニ、ナニカ、キロ」

〜神VS玄武〜

「さて…なんで僕は椅子に縛りつけられているのかな玄武君？」

「何を言っておる、今までののに比べれば軽い方じゃろ？」

「確かにね、玄武君が持つている謎の箱を除けば」

「今から神様にこの箱の中にある物を食ってもらおう、ただしヒントを5つ出すから何が入っているか当てれば今回は勘弁しておこうかの♪」

「勘弁ってさあ、一応君の上司、なんだったら最高神なんだけど…」

「ヒント1、」

「あ、もう無視なんだね」

「口には鋭い歯がならんでおる、ヒント2、泥の中に生息する、ヒント3、体は細長く、大きい物だと40センチメートルにもなるの、ヒント4、目は極端に小さくぱつと見無
いように見えるの、ヒント5、肉食性じゃ」

「…なにそれ」

「ならば食らうてもらおうかの！」

「ぎゃあー！　！　せめて、せめて火を通してー！」

正解　　〃ワラスボ〃

トウコツの憂鬱

「はあ…」

「どうしたトウコツ、二日酔いか？」

「違う…なあ、キユウキ…」

「なんだよ、小遣いならもうちよつと待て」

「そうじゃない…なぜ私は周りから雑な扱いなんだ？」

「己の胸に聞け」

「…私が強いからか？」

「…山で空腹と自業自得が原因で死にかけてた奴が？」

「…それを言うな…」

外伝肆 凶目 終